

一西だより



豊川市立一宮西部小学校通信
令和7年 2月 3日 第33号
発行;校長 村上謙一

【第4回 令和の日本型学校教育とチーム担任制】

「子供の主体性と当事者意識が失われている」
本校のチーム担任制導入は、この教育課題に真正面から向き合っています。

学校は子供たちが10年後、20年後の社会で生きていく力を育むところです。大人が「指導する」ことで、子どもが主体性と当事者意識を育む機会をうばっていたのではないかと。これまでの価値観=当たり前を変えるべき時がきています。

子供たちは様々な個性や育ってきた背景をもって、学校で生活しています。考え方、感じ方が違うのでトラブルがあつて当然です。トラブルに向き合うことで、人とは違うことに気づき、問題解決の道筋(社会性)を学ぶのです。しかし、私たち大人はこの貴重な学びの機会を子供から取り上げていたのではないのでしょうか。トラブルを未然に防ぐために順番に並ぶことを「指導」したり、善悪をジャッジして「ごめんなさい」「いいよ」と言わせて学びよりも解決を優先していなかったか。これを繰り返すことで、子供はトラブルの解決は大人がしてくれるということを知り、当事者意識を失うのです。この反省から、『令和の日本型学校教育』(R3.1.26 中央教育審議会答申)では「指導から支援」「伴走する教師」「子供を主語」といった言葉が見られるようになりました。

「学級経営」「指導」という言葉の主語は先生です。先生の指導がうまくいかなかったら、主語である先生が困るのです。子供たちは客体ですから、「どう解決するか」という当事者意識ははたらかず、自分にとって都合の悪い結果に対する不平や反発が生まれます。

学級の主語を子供に返すのが、本校が取り組むチーム担任制の目的です。学級で起こる様々な問題に、子供が当事者として向き合うのです。先生はその解決に向けた道筋を、人生の先輩として伴走して、支援するのです。伴走は放任ではありません。視力に障害がある人のマラソン競技と同じく、伴走者(先生)は競技者(子供)が走路を誤らないように適切に支援していくのです。

子供が当事者(主語)ですから、うまくいなくても不平や反発は生まれません。何度でもやり直すのです。先生は指導するのではなく支援するので感謝されます。チーム担任制は子供を当事者にして、主体性を育む手段の一つなのです。

【6年福祉実践教室 1/24】

社会福祉協議会の皆様にお越しいただき、6年生が体の不自由な方や目が不自由な方等がどのようなことに困るのか、どのような支援が必要なのかを学びました。



【3年生 消防署見学 1/28】



「日本は安全だから。」不審者情報が度々送信されていますが、海外からの旅行者が「あなたはなぜ、日本へ？」とたずねられた時によく口にする言葉です。その安全をささえてくれている消防署員のみなさまに会って、どんな活動をされているのかを学びました。

みんなマッチョでした。

【先生方も勉強を進めています】

昨年度の各種調査の結果から、本年度は2つめあてをもって教職員の研修に取り組みました。

① 子供が目標をもって取り組む力をのばす

本年度の体力テストの集計結果からは、「テストに目標をもって取り組んだ」と答える児童が全国・県平均を大きく上回りました。テストに向かう姿勢がたくましくなりました。

② 子供が全員参加する授業をつくる

残念ながら、授業中に机に突っ伏してしまう子供がいる実態がありました。先生方はそれを頭ごなしに叱るのではなく、興味を失う原因がどこにあるのかをつかんで励ましてきました。現在、突っ伏してしまう子は「0」です。

また、児童会を担当する2人の先生が、ルーラーメイキングで先進的な取組をしている名古屋市八幡中学校の視察に出向きました。なんと、学校にジュースの自販機があるとのこと。自販機設置に向けて、生徒が事業所や教育委員会と折衝を重ねていました。また事前に生徒が自主的にルール作りをしており、ここが本校の「一西小のやくそく」見直しに向けた学びにつながっています。当事者は文句を言うのではなく、課題を見つけその克服に向けて主体的に動くのです。子どもに当事者意識を育み、大人は子どもの動きに伴走する。そんな学校って楽しいですね。